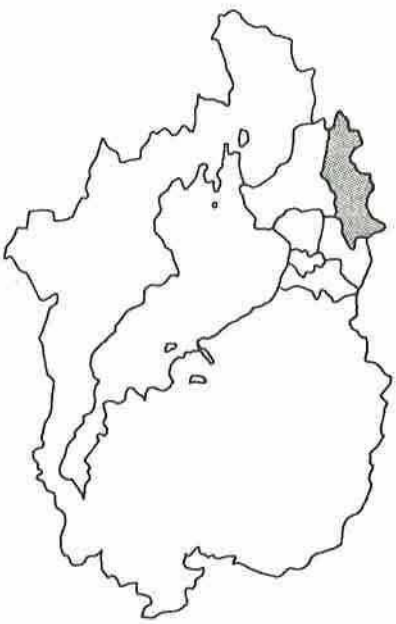
伊吹町文化財調査報告書第12集

上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅰ

上平寺館跡

じょうへいじやかたあと

—京極氏の居館跡—



1998.3

滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会

序

上平寺城跡遺跡群は伊吹山を背景として、本町の東部山麓にあります。16世紀初頭に京極高清によって整備された城館で、土塁や堀を伴った山城跡、全国屈指の庭園跡がのこる館跡や、今でも往時の面影を地割りにのこす城下町跡などを現地で良好に見ることができます。しかし、貴重な遺跡であるにもかかわらず、文化財的調査はほとんど着手できていません。 本報告書は、上平寺館跡の測量図を収録しました。今後の調査、研究資料として活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査に際して、地元上平寺区をはじめ、関係各位に多くのご理解・ご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。上平寺城館群の調査はまだはじまったばかりです。今後とも、よりいっそうのご指導をよろしくお願いいたします。

平成10年３月

伊吹町教育委員会
教育長　石　河　竹二郎

例　　言

1．本書は、文化庁・滋賀県の補助を受け、国庫補助事業として実施した、滋賀県坂田郡伊吹町における、上平寺城跡遺跡群分布調査事業のうち、大字上平寺にある上平寺館跡の調査報告書である。
2．本調査は、平成７年度から平成９年度に伊吹町教育委員会が滋賀県教育委員会の指導・助言を得て実施した。引き続き、上平寺城跡と上平寺南館跡の調査を計画している。
3．調査は、伊吹町教育委員会生涯学習課主任・髙橋順之が担当した。なお、調査体制は下記の通りである。

調査主体　　伊吹町教育委員会　教育長　石河竹二郎
調査事務局　　伊吹町教育委員会　生涯学習課
課　　長　　山崎完一（平成７年度～９年度）
課長補佐　　鈴木雄市（平成７年度～９年度）　　伊富貴鉄雄（平成９年度）
主　　任　　山田哲代（平成７～９年度）
主　　事　　甲斐沼和弥（平成７～９年度）　　児玉　澄（平成７～９年度）
作 業 員　　的場育代　　安田郁子　　的場誠司　　瀧澤康仁　　高橋靖法
田中秀人　　田中智容衣　　田中さおり

4．調査にあたって、次の方々からご指導・ご助言・ご協力をいただいた。厚く感謝の意を表す次第である。（敬称略・順不同）
高瀬要一・藤原武二・水野和雄・藤村　泉・木戸雅寿・中井　均・宮崎幹也
桂田峰男・土井一行
5．上平寺館跡の地形測量には、金城測量設計株式会社の協力を得た。
6．本書の執筆は、第５章は米原町教育委員会・中井均氏に玉稿を賜った。他は髙橋が執筆・編集した。

目　　次

序
例言
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 2
第２章　調査の経緯 …… 4
第３章　調査の結果 …… 6
第４章　まとめにかえて …… 10
第５章　付　論　　戦国期城館の庭園 …… 11

挿図目次

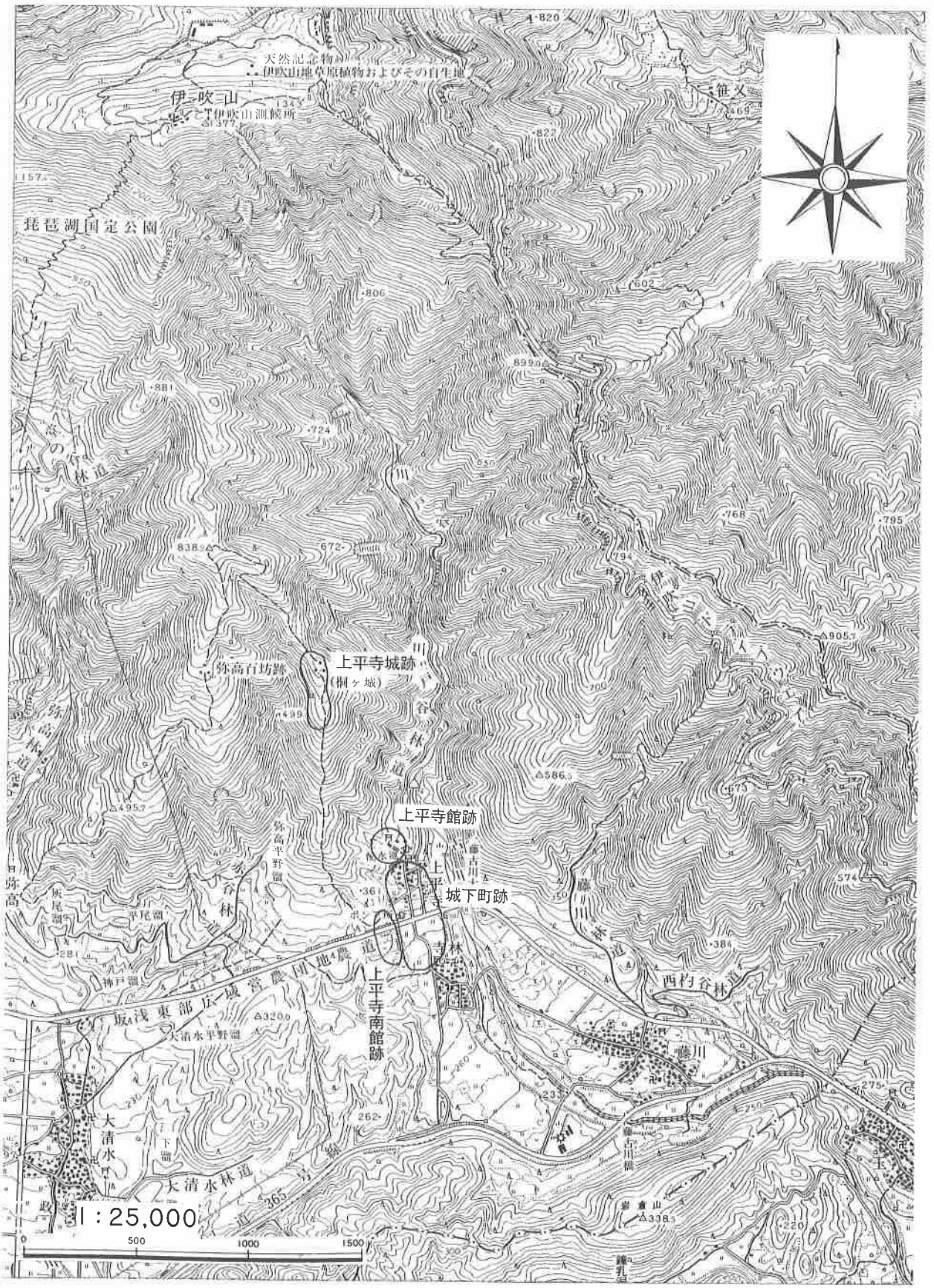
第１図　遺跡周辺位置図 …… 1
第２図　上平寺館跡平面図 …… 7
第３図　京極氏館跡庭園平面図 …… 8
第４図　京極氏館跡庭園景石立面図 …… 9
（付論）
第１図　漆間時国の住宅 …… 12
第２図　細川殿邸 …… 13
第３図　一乗谷義景館跡庭園 …… 13
第４図　江馬氏下館跡庭園 …… 13
第５図　東氏館跡 …… 14
第６図　高梨氏館跡 …… 14
第７図　北畠神社庭園位置図 …… 15
第８図　岩神館跡（旧秀隣寺）平面図 …… 16
第９図　岩神館跡（旧秀隣寺）庭園平面図 …… 16
第10図　慈照寺（東山殿）上部庭園 …… 17
第11図　上平寺館の推定模式図 …… 18

図版目次

図版１　上平寺城絵図・京極一族の墓地
図版２　京極氏屋形跡・隠岐屋敷跡・弾正屋敷跡
図版３　庭園跡

写真目次

写真１　上平寺城絵図（部分） …… 16


天然記念物
伊吹山地草原植物およびその自生地
伊吹山
伊吹山測候所
琵琶湖国定公園
上平寺城跡
(制ヶ城)
弥高百坊跡
上平寺館跡
上平寺城下町跡
上平寺南館跡
弥高平野
大清水平野
大清水
藤川
西村谷林道
大清水林道
1：25,000
0
500
1000
1500

第１図　遺跡周辺位置図

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

滋賀県の東北端に位置する伊吹町は、東を岐阜県不破郡関ヶ原町・揖斐郡春日村・同郡坂内村に接し、北および西は滋賀県東浅井郡浅井町、南は坂田郡山東町につながっている。滋賀県と岐阜県との県境をなす伊吹山地は、滋賀県下最高峰の伊吹山（標高1377m）を南端にして北へ延び、遠く越前・美濃国境の越美山系能郷白山へと続く。

町域は、東西7.0km、南北22.7kmの南北に長い地形をしており、北中部の集落は姉川沿いに点在し、南部および東部の集落は、弥高川・政所川・藤古川が作る扇状地の扇央部や扇端部に立地している。

今回報告する上平寺館跡は、藤古川が作り出す扇状地形の源に位置している。藤古川は滋賀県では珍しく、琵琶湖に入らずに岐阜県に流れ出て、揖斐川に合流して伊勢湾に入る。このことでもわかるように、上平寺館は滋賀県の東端にあり、やや岐阜県よりに向いて立地している。

伊吹山麓東南部地域には、北近江を支配した京極氏に関連する遺跡が集中している。上平寺城跡・上平寺館跡・上平寺南館跡などの城館遺跡と、これらに伴う城下町跡・寺院跡などで、今回の分布調査では、山城と居館・屋敷群・城下町をまとめて、上平寺城跡遺跡群として調査を進めている。

上平寺城は、集落背後の標高690mの伊吹山中腹の尾根上に位置している。地元では、霧ヵ城と呼ばれることが多い。上平寺館は、集落の山手山中の字「神屋敷」にある。また、南館は、上平寺館から南西に続く尾根上の字「高殿」に立地する。上平寺館跡は、現在伊吹神社の境内になっており、「隠岐屋敷」「オオツ屋敷」「ウマヤ」などの地名を伝える屋敷跡や土塁、京極一族の墓地、庭園跡などが確認できる。

これらの城館は以前から使用されていたものを京極高清の代に整備したものと考えられている。また、城下が営まれたのは、京極政経・材宗との抗争に終止符を打った永正２年（1505）から、浅見氏らの国人一揆によって、高清が退き、上平寺が焼かれた大永３年（1523）までと考えられる。その後上平寺城は、浅井氏が織田信長に対抗するために、元亀元年（1570）に改修していることが文献にみえ、また、同年京極高吉が上平寺館に隠棲しているが、これ以降は、廃城になったものと考えられる。

京極氏略年表

平安時代中頃	宇多天皇皇子敦実親王の養子・扶義が近江守となる
	扶義の子成頼が蒲生郡佐々木荘に住む（近江源氏佐々木氏）
	成頼の孫経方が蒲生郡小脇に館を構える
1159（平治元）	佐々木秀義が平治の乱で敗走
1180（治承４）	秀義、源頼朝挙兵に４人の息子と参戦
1190（建久元）	秀義の子定綱、近江国守護職となる

〔鎌倉時代〕

1241（仁治２）　定綱の子信綱、４人の息子に近江の所領を分配する

長子重綱に坂田郡大原荘（大原氏）、次子高信に高島郡田中庄（高島氏）、三男泰綱に佐々木荘の館と愛知川以南六郡（六角氏）、四男氏信に愛知川以北六郡（京極氏）を与える

このころ初代京極氏信が、太平寺（伊吹町）と柏原（山東町）に館を構える

1265（文永２）　氏信、幕府評定衆となる

1286（弘安９）　氏信、清瀧寺を菩提寺にする

1322（元亨２）　５代高氏（導誉）、検非違使として京都市中の警備に当たる

1332（元弘２）　高氏、後醍醐天皇隠岐配流の警護にあたる

北畠具行を柏原で処刑する

1333（元弘３）　高氏、足利尊氏とともに北条氏を討つ（鎌倉幕府滅亡）

〔室町時代〕

1337（建武４）　高氏、甲良荘（甲良町）に館を移し、勝楽寺城を築く

1338（建武５）　高氏、近江一国守護となる

1352（文和元）　７代高詮、出雲・隠岐（島根県）、飛騨（岐阜県）の守護となる

1370（応安３）　高詮、近江一国守護となる（以後は主に北近江半国守護）

1441（嘉吉元）　10代高数、将軍義教とともに赤松満祐に暗殺される

11代持清、北近江半国と出雲、隠岐、飛騨の守護となる

1467（応仁元）　応仁の乱で東軍（細川方）に属し、六角氏の観音寺城を攻める

1469（文明元）　持清、近江一国守護となる

1470（文明２）　持清の孫孫童子丸（高清か）が四ヵ国の守護となる

1471（文明３）　14代政経、出雲、隠岐、飛騨の守護となる（京極氏の家督争いおこる）

1473（文明５）　政経、近江守護となる

1479（文明11）　15代高清、近江北郡守護となる

1491（延徳３）　政経、近江の守護となる

1492（明応元）　高清、再び近江の守護となり、京極家の惣領職を継ぐ

1493（明応２）　高清、政経を破り家督争いがほぼ収まる

1505（永正２）　高清、政経の子材宗と和睦し、北近江を統一する。「是より二十五年無事也」（『江北記』）

このころ、上平寺城館や城下が整備される

1523（大永３）　浅見氏ら国人が上平寺を攻め、高清は尾張（愛知県）に退く

1534（天文３）　浅井亮政、小谷城で京極高広・高秀父子をもてなす

1542（天文11）　16代高広、高吉と浅井氏を攻める

1549（天文18）　浅井久政、高広と和議を結ぶ

1550（天文19）～1553　京極高広・浅井久政、南近江の六角氏を攻める

1560（永禄３）　浅井長政、美濃斉藤氏に対抗して上平寺城を攻める

17代高吉、六角氏と愛知郡野良田で浅井長政と戦い、敗れ清瀧に隠棲

1568（永禄11）　南近江の六角氏、信長に攻められて滅亡

1570（元亀元）　長政、信長に対抗するために朝倉氏の援助を受け上平寺城を改修

高吉、上平寺館で隠棲する

1573（天正元）　浅井氏滅亡

18代高次、五千石を与えられ京極氏の旧臣をまとめる

1582（天正10）　高次、本能寺の変に際して長浜城を攻める

1584（天正12）　高次、秀吉から罪を免ぜられ高島郡大溝城（高島町）二千五百石となる

1590（天正18）　高次、近江八幡城二万八千石を与えられる

1595（文禄４）　高次、大津城六万石を与えられる

〔江戸時代〕

1600（慶長５）　高次、関ヶ原の戦いで徳川方として大津城に籠城する

弟高知も徳川方に属し関ヶ原で戦う

高次、若狭小浜（福井県小浜市）八万五千石となる

1601（慶長６）　高知、丹後田辺（京都府舞鶴市）十二万石となる

1622（元和８）〔高知家〕長男高広を宮津（京都府宮津市）七万八千石、次男高三を田辺三万五千石、養子高通を峰山（京都府峰山町）一万千石に分ける

1624（寛永元）〔高次家〕小浜十万六千五百石

1634（寛永11）〔高次家〕松江（島根県松江市）二十六万四千二百石

1637（寛永14）〔高次家〕竜野（兵庫県龍野市）六万石

1658（万治元）〔高次家〕丸亀（香川県丸亀市）六万六十七石

1666（寛文６）〔高知家〕宮津京極家改易

1668（寛文８）〔高知家〕田辺から豊岡一万五千石に転封

1694（元禄７）〔高次家〕多度津（香川県多度津市）一万石を分ける

1869（明治２）　廃藩置県

注：持清以降の代数は、小和田哲男「京極氏の内訌と上平寺城」『近江の城』16によった。

〈参考文献〉　西村清雄『佐々木京極氏と近江清滝寺』

山東町　1991　『山東町史』

伊吹町　1998　『伊吹町史　通史編上』

第２章　調査の経緯

上平寺城跡遺跡群は、守護大名京極氏の山城と山麓の居館や庭園、重臣の屋敷群と城下町の３つのセットが良好に残されている遺跡群である。浅井氏の小谷城（浅井町・湖北町）、六角氏の観音寺城（安土町・五個荘町・能登川町）とともに、滋賀県の中世史を解明するうえで欠かすことのできない遺跡であり、全国的にも貴重な城館遺跡といえる。

しかし、上平寺城については、一部の研究者以外、近年まで全くと言っていいほど知られていなかった。地元でも、京極一族の墓や、「せんざい」と呼ばれている庭園跡、「オオツ屋敷」などの一部の屋敷名などが個々に言い伝えられていただけであった。

これは、従来の中世城郭の研究が、文献史学が中心であり、今日の城郭研究の一翼を担っている縄張り研究や発掘などによる考古学的調査が行われなかったために、小谷城や観音寺城に較べ、文献があまり残っていない上平寺城についての調査・研究がなされなかったことによるものとおもわれる。

しかし、昭和57年から9年間行われた滋賀県中世城郭分布調査の過程で、近江の1300カ所を数える中世城館跡の中でも、第1級のものであるとの認識が示され。また、近年、上平寺城に関して長谷川銀蔵・博美、小和田哲男、小島道裕、中井均、高橋順之の研究が発表されて、ようやく全国的に知られるようになった[1]。

さらに、近世の比較的早い段階に作成されたと思われる『上平寺城絵図』(伊吹町役場蔵)は、現況とほぼ合致した上平寺城跡遺跡群の全貌が描かれており、規模や各遺構の配置が想定でき、城下町の存在の可能性を示す重要な資料として注目されている。

伊吹町教育委員会では、平成7年から9年にかけて、城下町部分の約16カ所において試掘調査を実施した。調査では、多くのトレンチで、柱穴および溝状遺構を検出し、16世紀前半を中心とする遺物が出土した。また、平成9年に滋賀県教育委員会が実施した、上平寺南館遺跡の発掘調査では、土塁や堀切を兼ねた石敷きの道がみつかっている。

遺跡群周辺では、ほ場整備などの開発事業が計画されており、広範囲にわたる遺跡群の早急な把握と、保護・保存をはかるために、10ヵ年をかけて上平寺城跡遺跡群分布調査を実施することとなった。まず、平成7年度から9年度に上平寺館跡を行い、以後、南館跡、上平寺城跡を行う予定である。

上平寺館跡の調査は、3ヵ年の地形測量業務を中心に、遺跡内および周辺の踏査、遺物の地表面採集を行った。地表面掘削を伴う確認調査については、地元区との協議の結果、見送った。平成7年度は、伊吹神社や京極家墓地を中心とする上平寺館の上部、8年度は、京極氏館跡や隠岐屋敷などの中心部分と庭園遺構。9年度は、大津屋敷や内堀など館への導入部分を調査対象とした。

ここでは、上平寺館跡の測量調査の成果をとりあえず概報として報告することにした。

註1　長谷川銀蔵・博美　1985「上平寺城跡」『近江の城』第16号
　　小和田哲男　1985「京極氏の内訌と上平寺城」同上
　　小島道裕　1989「上平寺城下について」『近江の城』第34号
　　1997「第2章城下町　3上平寺城」『城と城下』
　　中井均・高橋順之　1994「上平寺城とその城下町」『近江地方史研究』第29・30合併号
　　中井均　1997「知られざる山城・上平寺城」『近江の城―城が語る湖国の戦国史』

第3章　調査の結果

測量範囲は、集落から伊吹神社境内を北東方向に入り、途中で90度北西に曲がって、伊吹神社の鳥居から階段へと続く参道の左右に広がる屋敷跡を中心におこなった。

南は、集落のもっとも山手に位置し、上平寺館跡に隣接した杉本坊の建物を取り込んだ。杉本坊は、上平寺城館の前身だったと思われる寺院・上平寺の唯一法灯を伝える寺院である。東側は、藤古川（川戸川）に落ちる急峻な川戸谷の崖で、測量範囲は集落から川戸谷へ入る林道までを図化した。南西は、南館跡へ続く尾根と上平寺館跡を区切る風呂屋谷と呼ばれる谷で、「内堀」と呼ばれ、東へ向きをかえて溝となり藤古川に落ちる。北は伊吹山頂に続く尾根で、館跡の最上部にある伊吹神社と金比羅社までを範囲とした。

館跡は、北西－南東方向が約250m、幅約200mを測り、伊吹神社を頂点に下方に広がっている。

確認した主な平坦地は25ヵ所で、最も大きなものは、絵図などから京極氏館（屋形）に比定できる平坦地で、約60×40mを計り、さらに約55×15mの庭園遺構が続く。京極氏館跡の南半には、約35×30mの高まりがあり、何らかの建物があったものと思われる。以下、蔵屋敷に比定できる平坦地が約55×45m。弾正屋敷が約45×40m、隠岐屋敷が約32×25mを計る。

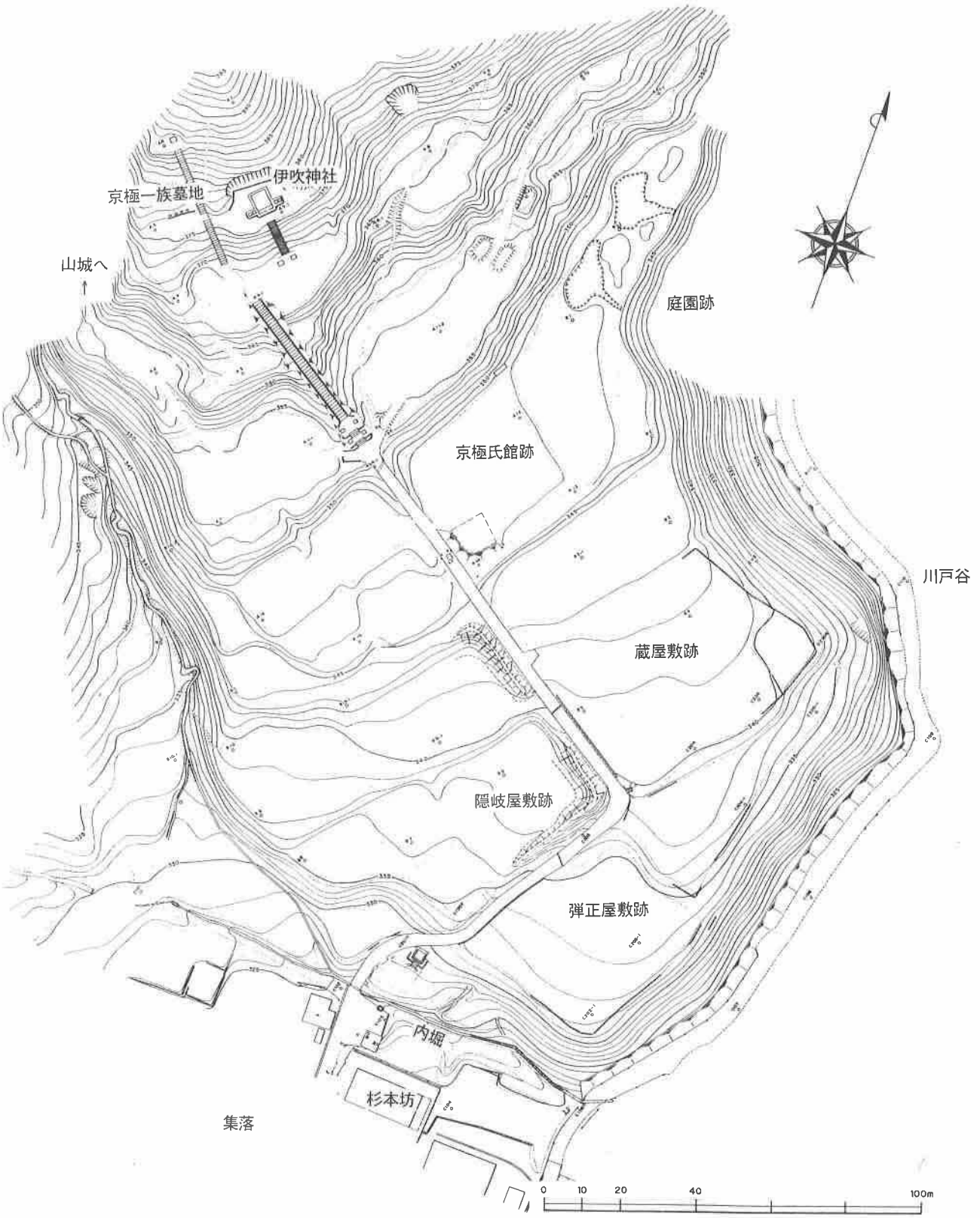
屋敷群を分ける中央の道は、鳥居のところで左右に分かれる。左に行く道は、2つの平坦地を通り山城へ行く道で、古図にも見られる。右に上がる道も2つの平坦地から山城に続く間道である。城に登る本道は、集落内にある杉本坊の横から出ている道といわれている。

参道が直角に曲がるところの内側に、基底部幅約6m、上部幅約1.2m、高さ約2.5mの逆L字状の土塁が良好に残っており、続く上の平坦地にも道沿いに土塁がみられる。また、庭園跡の上の平坦地にも約6×3m位の土塁状の遺構があるが、その性格はわからない。その他、数カ所の土塁状遺構が見られる。

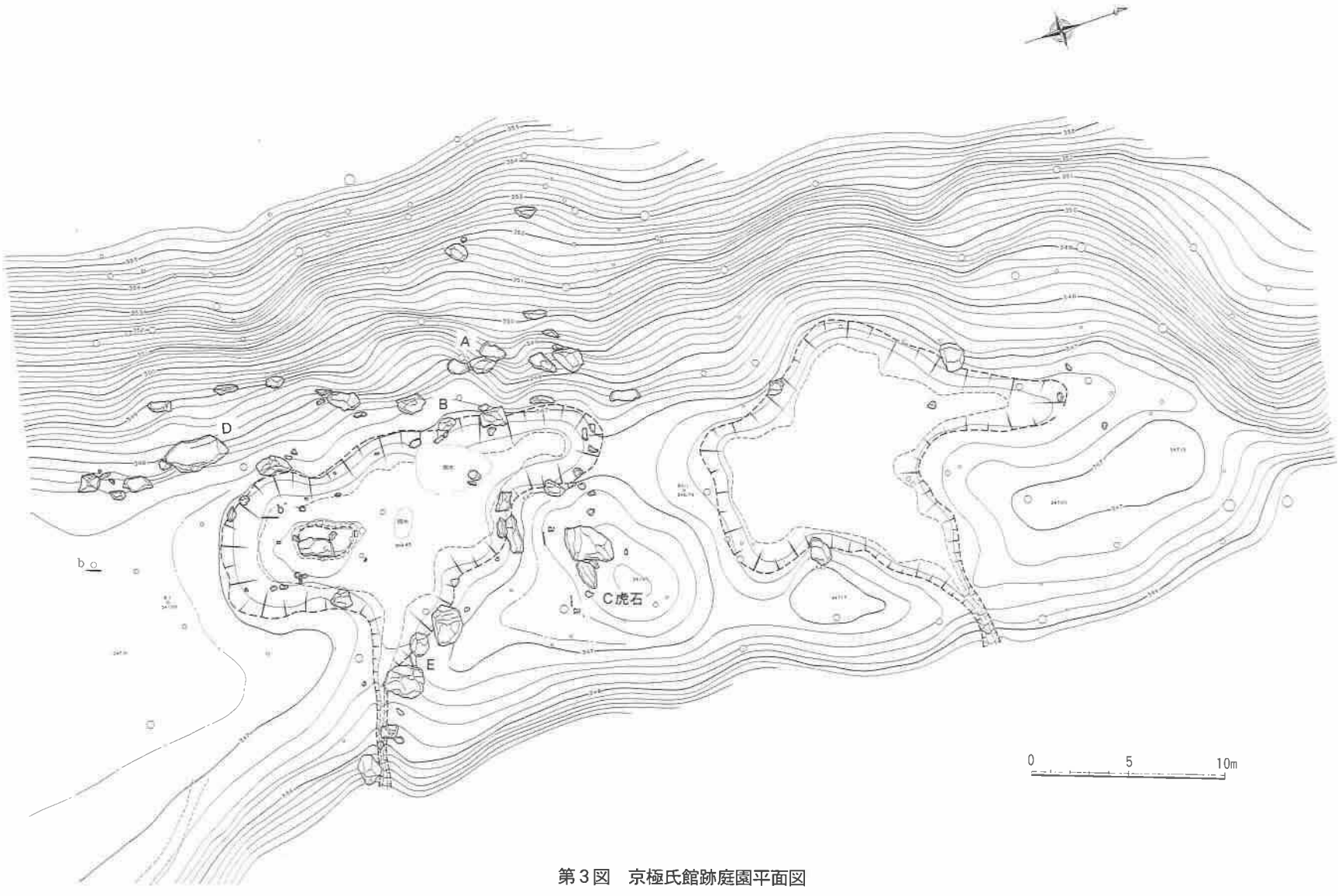
墓地は、伊吹神社の左側に京極一族の墓があり、「永正三年（1506）四月七日」銘の五輪塔など数基が並んでいる。その下の平坦地の巨木の脇に1、2基の五輪塔があり、京極氏館の山側にも墓石群がある。また、道が直角に曲がるところにも五輪塔を集めたお堂があり、これらは、付近にあったものを地主が集めたものという。

上平寺館跡内にある建物は、薬師堂・伊吹神社・金比羅社と、京極氏館跡の南端を崩して建てられた町の水道施設などがある。薬師堂は、もともと伊吹神社下の平坦地に神社と並んで建っていたものを、神仏分離の影響で、明治30年代に現在地に降ろしている。

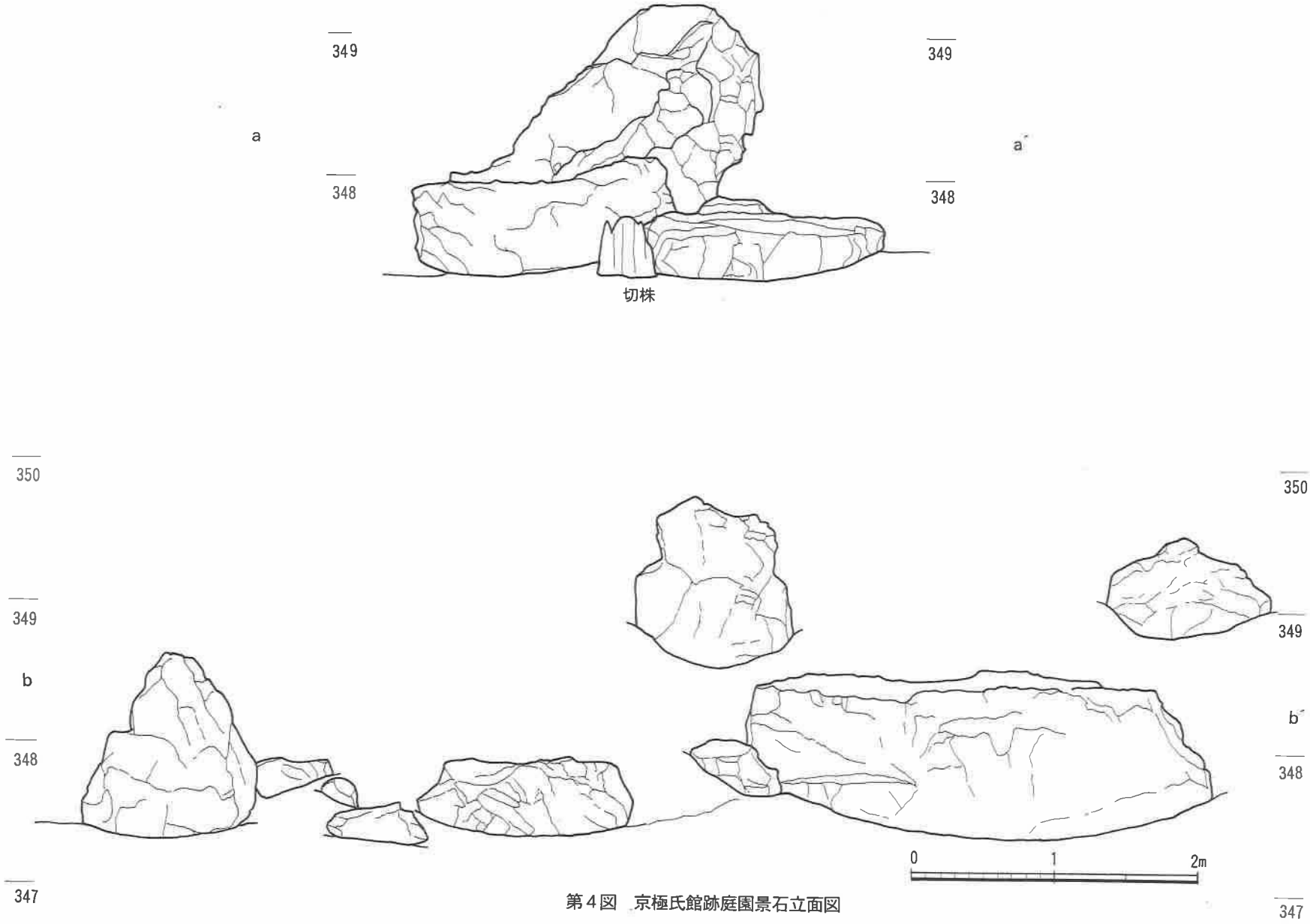
その他、特筆すべき遺構として京極氏館跡庭園がある。庭園跡は2つの池があり、「虎石」とよばれる巨石や、山側の斜面に多くの石が配されている回遊式林泉庭園で、南側の池は小ぶりの護岸石が比較的よく残り、平らな石を添えた中の島がある。斜面中央付近の石組は、滝副石（A）や水分石（B）を思わせるものがある。庭園の石は、後にもち出されたものがあり、中の島には立った状態の石などがあった可能性もある。又、虎石は、羽根をもつ鶴石組（C）、南西側斜面の横に据えられた大石は亀石組（D）か。



第２図　上平寺館跡平面図



第３図　京極氏館跡庭園平面図



第４図　京極氏館跡庭園景石立面図

南側の池の排水路には石橋がかかっていたようで、橋挟み石の石組（E）がみられる。今後、庭園構造の検討を進めていきたい。使われている石は約100点。大小さまざまで、長軸が２ｍを超える石は、虎石を含めて５つみられる。館側の平坦地に建物があり、そこから、庭園と川戸谷の四季を鑑賞したのかもしれない。

石のほとんどはチャート質の石材と思われる。特に60cm以上のものはすべてその可能性がある。護岸の石にわずかに砂岩などが用いられている。これらの石は、館跡の下を流れる藤古川の河原に散在していることが確認できた。

造園時期が特定できる武家屋敷庭園として、全国的にも貴重な遺構といえる。

〈参考文献〉上平寺館跡の地名や伝承については、小島道裕氏「上平寺城下について」『近江の城』34号を参考にしました。

第４章　まとめにかえて

今回の調査で、京極氏館を中心にした上平寺館跡の、おおよその範囲・形状や立地状況が把握できた。平坦地や土塁などの遺構は、比較的良好に残されており、江戸時代初期のものといわれている絵図の「伊吹大権現」「本堂」「御屋形」「御自愛泉石」「蔵屋敷」「弾正屋敷」「隠岐屋敷」「厩」「御廟所」などが、それぞれの平坦地に比定できる。

地表面の遺物採集では、ほとんどの平坦地から遺物が採集できた。今回、報告できなかったが、土師質皿を中心に、常滑焼の甕、越前焼擂り鉢、美濃瀬戸大窯の陶器、中国青磁細片、志野焼などの破片がある。土師皿は15～16世紀前半、常滑などの陶器類も16世紀前半頃が中心になると思われ、ほぼ、上平寺館の時期と合う。志野焼は、やや新しい時期に属す。遺物については、後日の本報告で、南館跡・山城跡などの成果とまとめて考察したい。

越前一乗谷朝倉氏館はもとより、近年、山口の大内氏館跡、能登畠山氏館跡、伊勢北畠氏館跡、美濃土岐氏館跡など守護系大名の館跡が解明されつつある。上平寺館跡も、早急に資料を整え、全国的な視野での比較検討が我々の責務であろう。

また、今回は掘削を伴う試掘調査および発掘調査を実施できなかった。したがって、地下に眠っていると思われる遺構・遺物の確認ができず、各屋敷地の建築物や建築様式、配置の解明等は、今後の大きな課題として残っている。また、当遺跡は山間部に位置しているために、自然災害などの危険性もあり、庭園跡などは、定期的に刈り払いや倒木の除去をしていく必要がある。今後も測量図をもとにして、様々な角度からの調査をおこなっていき、上平寺館跡の解明につとめたいと考えているので、地元区および地主各位のご協力と関係機関のご指導をお願いしたい。

末筆ではありますが、時間等の都合により、報告のみで終わったことをお詫び申し上げます。

第5章　付論
戦国期城館の庭園

米原町教育委員会　中　井　　均

1．はじめに

伊吹町内に所在する上平寺城跡、上平寺館跡は北近江の守護京極氏の本城であったにもかかわらず、その存在はあまり知られていなかった。ところが上平寺館跡では守護屋形を中心に多くの屋敷地割りが450年間ほぼ残されていたのである。特に守護屋形の背後に位置する庭園は、今回伊吹町教育委員会による測量調査に伴い、倒木の除去、除草、清掃され、当時の姿をよみがえらせた。ほぼ原形をとどめる庭園は数少ない戦国期武家庭園として実に貴重なものである。

拙稿ではこの上平寺館跡の庭園を中心に戦国期の武家庭園について若干の考察をおこなうものである。

2．最近の庭園研究

従来、戦国期の武家庭園といえば北畠神社庭園、旧秀隣寺庭園など遺存する庭園からしかアプローチできなかった。しかし昭和40年代以降の中世城館跡の発掘調査によって新たな庭園遺構が検出された。その嚆矢となったのが一乗谷朝倉氏遺跡の調査であった。湯殿跡・諏訪館跡・南陽寺の庭園は遺存していたが、義景館跡・中の御殿をはじめ城下の屋敷の庭園は発掘調査によって検出されたものである。

こうした戦国期の武家庭園を総体的に論じたのが上山春平であった。上山は国家論をテーマに中世城郭に焦点をあて、独自の城郭研究を展開している。そして城と庭園と都市の変遷から戦国時代の歴史的位置付けを試みた。(1)

一方、造園そのものから一乗谷の諸庭園について論じたのが藤原武二である。藤原は一乗谷の庭園を詳細に分析し、「城主も庭者も京都の庭園に関心を持ち、よく知っていたにちがいない。一部に銀閣寺庭園の影響がみられるが、滝副石や水分石、橋挟石などの役石を忠実に配置するなど、京都の庭や作庭書を熟知した専門の庭師の手によって、一乗谷の林泉庭園の多くは作庭されたと推察される。」と結論している。(2)

ところで歴史学・考古学からこうした戦国期庭園へのアプローチは最近ようやくおこなわれるようになった。江馬氏下館跡は1973～7年に発掘調査が実施され、庭園遺構が検出された。1993年以降、発掘調査成果に基づいた整備事業が実施されることとなり、園池の構築年代を明らかにする調査がおこなわれた。大平愛子はその報告の中で全国に遺存、検出された武家庭園の集成をおこない、特に池の規模と屋敷面積とを検討した。その結果、15世紀代においては池占地指数はほぼ同じであるのに対し、16世紀になると公的な性格が強い館では池占地指数は低下する一方で、家臣や領主の妻妾の館では高くなるという傾向にあることを指摘した。(3)

小島道裕は同報告書で、地方の武家庭園は地方豪族が自ら生み出したものではなく、中央（京都）で成立した儀礼空間としての館という装置を模倣したものであるとし、室町幕府と直接結びつき、その権威を地方において体現するならば、その儀礼装置としての館も

中央に倣うのは必然であると結論している。[4]

3．武家庭園の成立

地方武士の居館については近年考古学の立場から様々な研究が活発である。その出現については、橋口定志は東国においては14世紀であるとし、[5] 中井均は西国においては11世紀末にはすでに出現するとしている。[6] しかしこうした出現期の居館に庭園は伴わない。

鎌倉時代の居館については絵画資料が残されている。『法然上人絵伝』には美作の押領使漆間時国の館が描かれているが、庭園は描かれていない（第1図）。また、『男衾三郎絵詞』に描かれた東国武士の館でも庭園は認められない。さらに鎌倉の上級武士の屋敷と考えられる今小路西遺跡でも庭園は検出されていない。このように鎌倉時代においては武家の居館や屋敷には庭園は伴うものではないようである。[7]

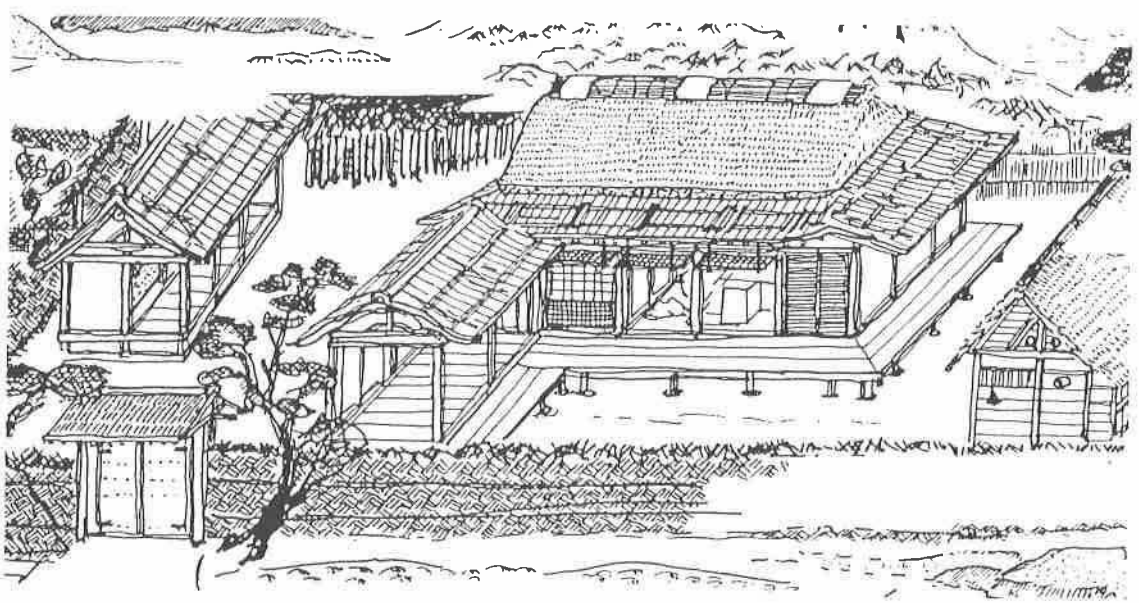
その出現の画期となるのは、小島道裕が指摘する天授四年（永和四：1378）の足利義満の室町殿（花の御所）の造営であろう。[8] 室町幕府の儀礼の成立としてとらえられるものであり、その後の儀礼空間として引き継がれていく。

洛中洛外図屏風に見られる「公方様邸」（足利将軍家邸）や「細川殿邸」（管領家）の庭園はまさに室町殿の庭園を引き継いだものである。洛中洛外図屏風からは武家庭園のみならず、館の構造が把握できる点で重要である。すなわち正面に２つの門、唐門（表門―礼門）と棟門（副門）があり、門を入ると広場があり、正面に主殿（ハレの空間）があり、その奥に常の御所（会所）という奥向きがある。庭園はこの常の御所に面しており、そこに通されて初めて目にすることができるわけである（第２図）。

こうした構造を現存する庭園や発掘調査された庭園から具体的に検討してみよう。

１．一乗谷朝倉氏遺跡（福井市）

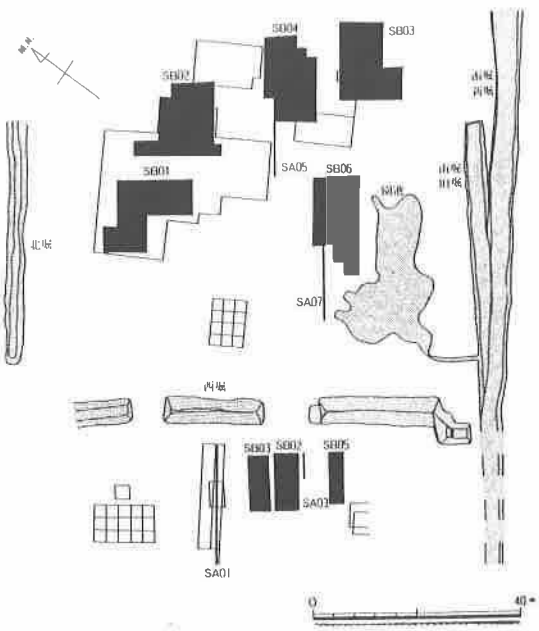
義景館は東に一乗山を背負い、三方を堀と土塁で囲む居館で、西に表門（礼門）を開く西礼の館となる。正面に２門を配置せず、裏ノ御門は北側に開いている。館内の北東部に10数棟の建物群が配されており、南西部は広場となる。庭園は館の南東隅部に山裾を利用して作庭されている。時期は16世紀中頃の作庭である[9]（第３図）。



第１図　漆間時国の住宅（『法然上人絵伝』より）（出典文献１）

第２図　　細川殿邸（出典文献２）

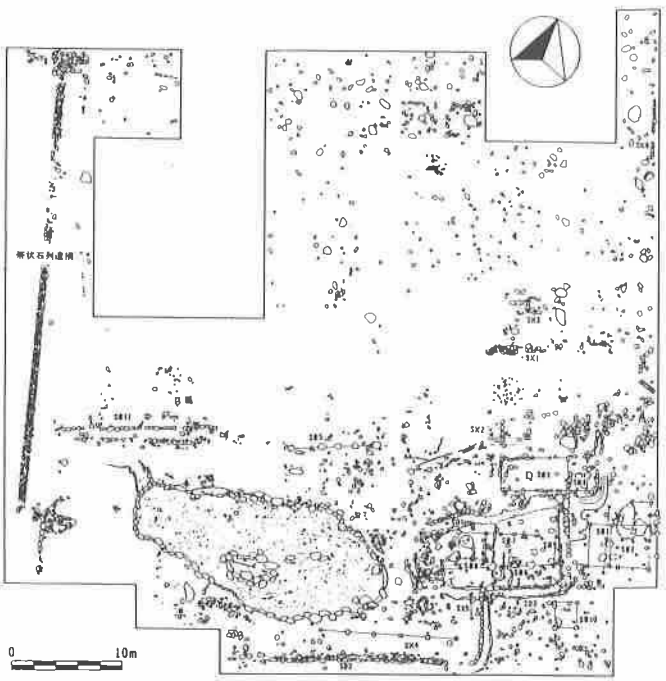
第３図　　一乗谷義景館跡庭園（註２による）



第４図　　江馬氏下館跡庭園（註３による）

2．江馬氏下館跡（岐阜県神岡町）

江馬氏下館跡は二十五山から南に伸びる尾根を背後に、三方を堀で囲む居館である。正面の西堀は深い薬研堀となり、二カ所に土橋が設けられる。一乗谷朝倉氏館同様西礼の館となる。さらに細川管領邸と同様に正面に２門を配する形態をとる。館内は正面が広場的空間となり、建物跡はその奥部に設けられる。庭園は正面を入った右手（南西部）に作庭されるが、SA07の塀で遮断され、SB06に入室して初めて鑑賞できることとなる。細川管領邸と同一構造であり、SB06は会所的性格の建物と想定できる。時期は15世紀の作庭である。[10]



第５図　東氏館跡（註１１による）

なお、館跡背後の山稜の南端頂には江馬氏の本城、高原諏訪城が位置する（第４図）。

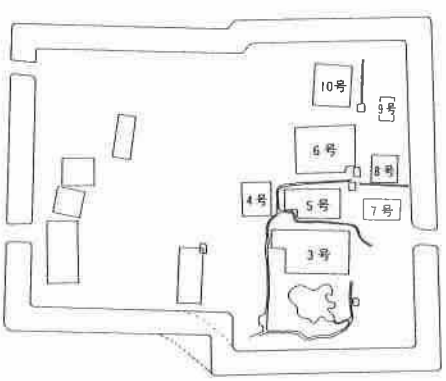
3．東氏館跡（岐阜県大和町）

東氏館跡は篠脇城を背後に立地している。現況では土塁、堀ともに認められないが、近世に描かれたとみられる篠脇城跡略図（『粟飯原家文書』）には山麓に土塁囲いの館跡が認められる。居館前面には栗巣川が流れる。

居館内部の空間構成は詳らかではないが、正面部分に遺構は希薄で、やはり広場的空間であったとみられる。庭園は山麓側、つまり居館奥部に位置する。ただし山の斜面地は利用していない。時期は15世紀の作庭である[11]（第５図）。

4．高梨氏館跡（長野県中野市）

高梨氏館跡は鴨ヶ嶽を背後にひかえた扇状地に四方を土塁と堀によって囲まれた凸状の方形居館である。西側に２カ所の門が開いており、南側が礼門になるものと考えられ、西礼の館となり、その構成は一乗谷朝倉氏館、江馬氏下館跡と同様である。居館内部は西半分が広場的空間となり、建物群は東半分に集中している。庭園は居館の南東隅部に作庭されている。３号建物から鑑賞できる構造であり、３号建物が会所的性格を有する建物であったと考えられる。時期は15世紀の作庭である。



第６図　高梨氏館跡（註12による）

なお、背後の鴨ヶ嶽山頂には高梨氏の本城、鴨ヶ嶽城跡が位置する[12]（第６図）。

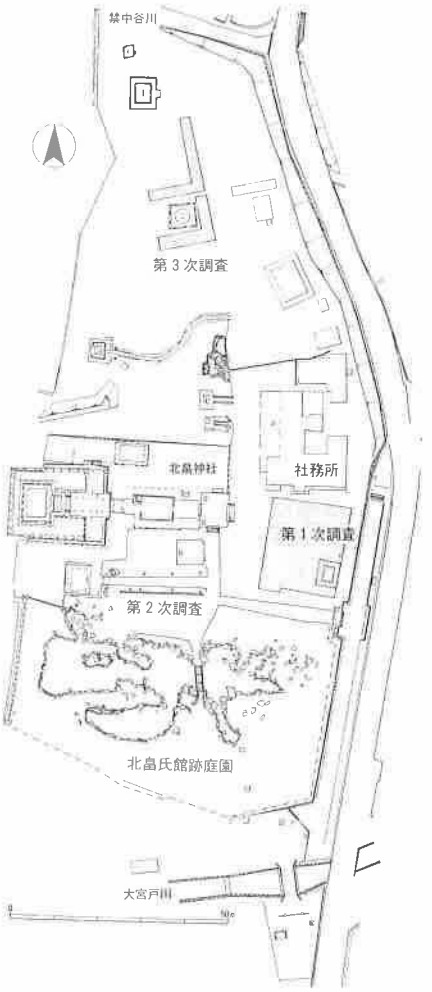
5．北畠神社庭園（三重県美杉村）

北畠神社社地は伊勢国司北畠氏居館跡で

ある。西に山を背負い、前面には八手俣川が流れる。居館の構造は詳らかではなく、庭園が居館内のどの位置に配されていたかは不明であるが、南側の谷川によって区切られていることから、居館の南端に位置していたことはまちがいない。江戸時代に描かれた城下絵図には「北畠大納言顕能卿代々御屋舗」と記された方形区画の南端に庭園が描かれている。また西側は山麓であることから、居館の正面は東側であったと考えられる。そうなれば洛中洛外図屏風にみえる細川管領邸と同様の配置といえよう。

最近の発掘調査で居館の西側を区画する高石垣や居館にとりつく石段状のスロープ等が検出されている。こうした施設は15世紀の石垣として注目されるとともに、今後居館の構造が明らかにされ、庭園の作庭年代も明確になるものと期待される。

なお、背後の山の頂上には北畠氏の本城、霧山城跡が位置している（第７図）。



第７図　北畠神社庭園位置図（出典文献３）

６．旧秀隣寺庭園（滋賀県朽木村）

国指定名勝の旧秀隣寺庭園は現在興聖寺境内に位置している。

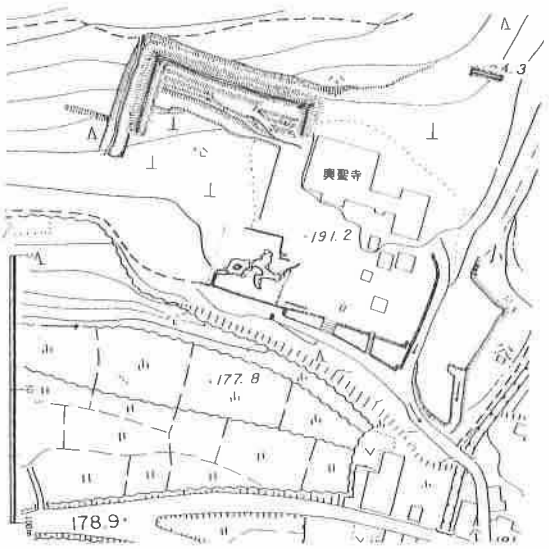
朽木氏は上殿、下殿、岩神殿と呼称されており、一族の屋敷地の所在によってこうした呼称が用いられたと思われる。現在、洞昌寺＝朽木殿＝御屋形様＝上殿、下殿＝岩神殿と推定され、岩神殿が居住していたのが、岩神館である。この岩神館が慶長十一年（1606）廃され、周林院（秀隣寺）となった。

旧秀隣寺庭園はこの岩神館内に周林寺創建以前に作庭されたもので、この名称は正しくない。

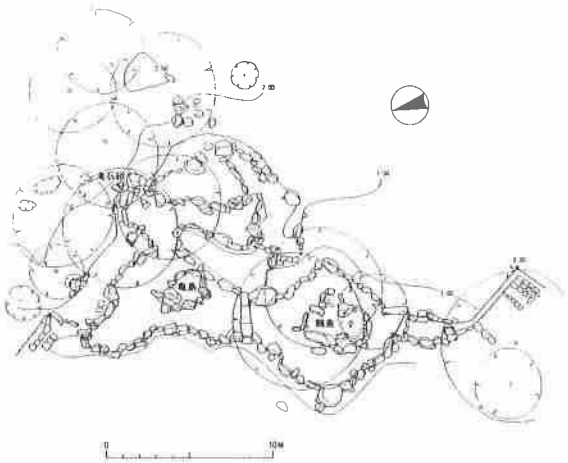
岩神館跡は現興聖寺墓地に土塁、空堀を残しており、南北約120ｍ、東西約90ｍの方形館と考えられる。東山が西方背後に、安曇川が東方前面にひかえ、北側は谷により、南側は土塁と空堀によって区切られる。館正面は東側と考えられる。発掘調査は実施されておらず、居館内部の構造は不明である。庭園は居館正面中央に位置している。室町将軍足利義澄（十一代）、義晴（十二代）、義輝（十三代）が都の争乱を避けて、「朽木氏の館」に滞留しているが、この館が岩神館であったと考えられる。16世紀前葉の作庭と考えられる。一説には細川高国の作庭と伝えられている（第８・９図）。

７．上平寺館跡（滋賀県伊吹町）

上平寺館跡は伊吹山を背後に谷部分をテラス状に段々に削平した区画群から構成されている。近世初頭に描かれた絵図には大津屋敷、厩屋敷等の名称が記されている。そうした屋敷群の一つに御屋形と記された一画があり、京極氏の居館である。



第８図　岩神館跡(旧秀隣寺)平面図（出典文献４）



第９図　岩神館跡(旧秀隣寺)庭園平面図（註２による）

居館は南北約60ｍ、東西約40ｍの方形区画となり、その北奥に庭園が築かれている。絵図には「御自愛泉石」とあり、守護館に伴う庭園であることはまちがいない（写真１）。

居館跡は発掘調査が実施されておらず、内部空間は不明である。居館正面は南側と考えられ、庭園はその最奥部に位置しており、さらに、上段の削平地の切岸部を利用して立石等も配されている。16世紀前半の作庭である。

なお、背後の尾根先端上には京極氏の本城、上平寺城跡が位置している。

４．考察

さて、まだまだ数少ない調査例や遺存する庭園ではあるが、若干の考察を試み、上平寺館跡の位置付けをおこないたい。

まず居館内部における庭園の位置を分類してみると、

Ⅰ類

Ⅰ類は庭園が居館の奥部隅に位置するもの。さらに２形態に細分できる。

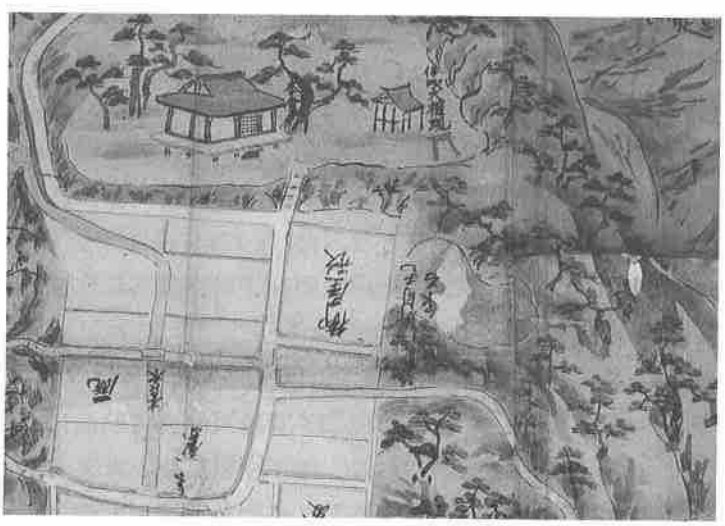


写真１　上平寺城跡絵図（部分）（伊吹町役場所蔵）

Ⅰ－ａ類は山裾を利用して園池や配石等をおこなうもの（朝倉義景館跡、上平寺館跡）

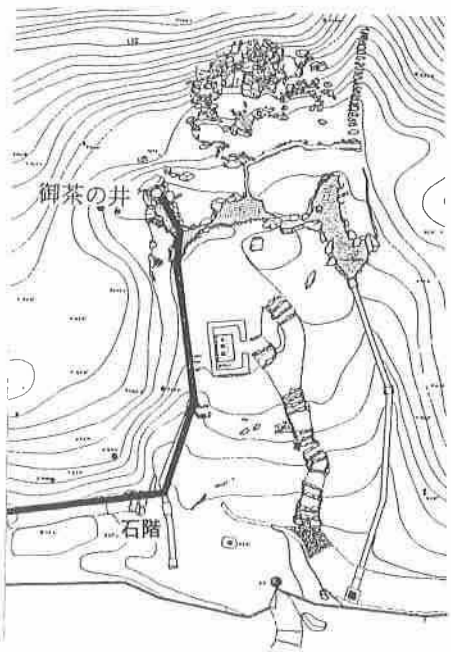
Ⅰ－ｂ類は山裾を庭園に取り込まないもの（東氏館跡、高梨氏館跡）

Ⅱ類

Ⅱ類は居館正面の左右どちらかに位置するもの（江馬氏下館跡、北畠神社庭園、旧秀隣寺庭園）

に分類することが可能であろう。いうまでもなくⅡ類が室町幕府の御所や、細川管領邸を模したものである。

Ⅰ類についてもその系譜は室町幕府に求められよう。慈照寺は八代将軍足利義政が山荘として造営した東山殿で文明十五年（1483）に建てられたが、その奥部には山裾を利用した庭園（上部庭園）がある（第10図）。川上貢によれば東山殿には烏丸殿や室町殿のように寝殿を中心とする晴向き施設がなく、常御所、会所、泉殿、持仏堂、観音堂などの奥向き施設のみで構成されていることより、その性格を将軍の隠居所と考えている。[13] 東山殿はⅠ類とⅡ類を兼備しているが、その一つ、奥部の山裾を利用する庭園がⅠ類へ受け継がれていったものと考えられる。



第10図　慈照寺（東山殿）上部庭園
（註13による）

こうした庭園を有する居館で今一つ注目できる点に、背後の山頂に詰城が存在する点である。この配置についてもその最古例となるのは義政の東山殿であろうと考える。東山殿の背後には天文十八年（1549）足利義晴によって築城された中尾山城跡が位置している。しかし、これ以前に既に城郭施設が存在した伝承がある。義政が東山殿に閑居したとき、世続氏をはじめとする近習に中尾山の櫓番を命じたというものである。[14] 応仁文明の乱により、平地居館では対応することができず、恒久的な山城が出現する。将軍の別荘とて例外ではなかったのである。それは即、地方へも波及したわけである。

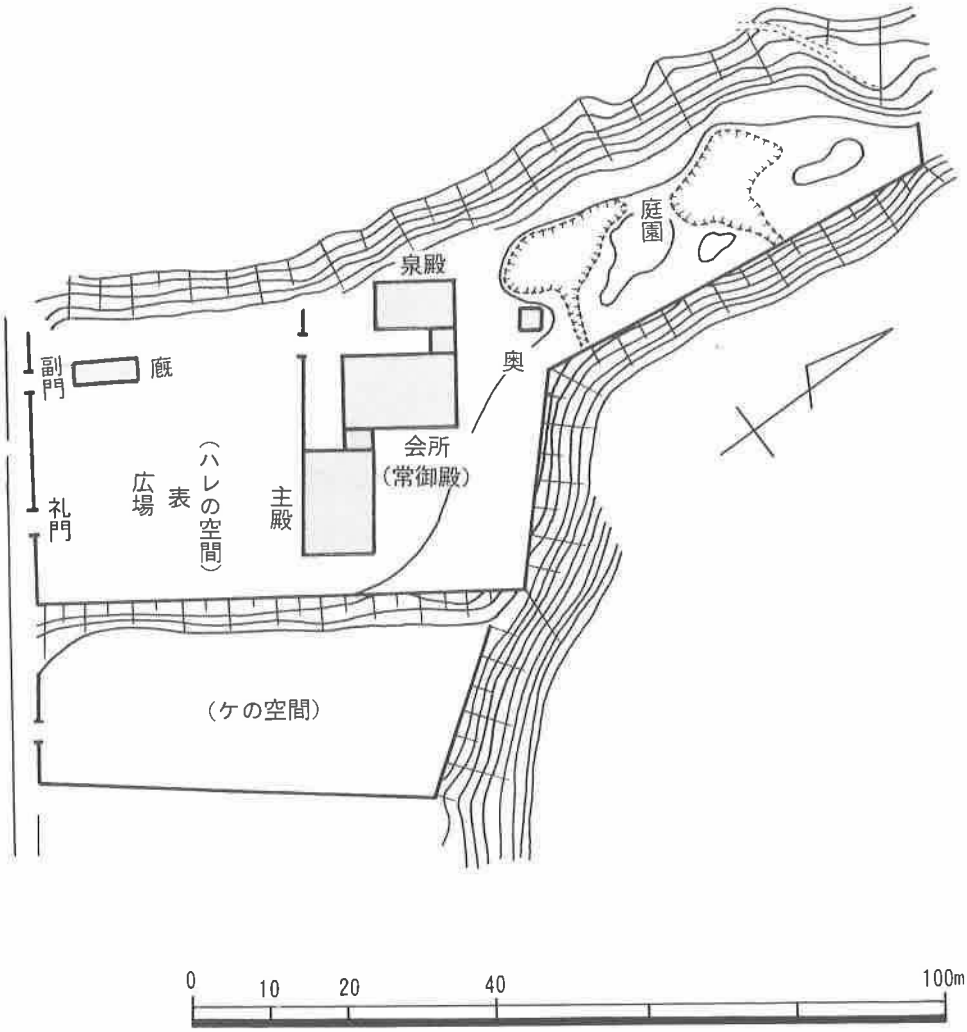
幕府の儀礼としての居館と庭園。それに加えて防御の場として山城が設けられたのであろう。

こうした山城と居館の配置は全国各地で認められる。ところが中世の居館跡が数多く調査されているにもかかわらず、庭園遺構を伴う事例は極端に少ない。つまり庭園の有無に権力差が如実に示されていると考えられる。

防御空間（詰城）―居住空間（居館）と、防御空間（詰城）―儀礼の場＋居住空間（庭園と居館）に大別でき、庭園の存在に幕府の公権力を具現化できる権力の存在を指摘することができよう。さらに付け加えるならば、居館内部の構造にハレの場とケの場が存在する構造に庭園は伴うものであり、土豪・国人クラスの居館では、ハレの場とケの場は共有するものであったと考えられる。

こうした状況から上平寺館は近江半国守護京極氏の居館にふさわしいものであり、山城、居館、庭園さらには城下町の地割りが遺存する貴重な遺構として評価できよう。第11図は各地の調査事例から推定した上平寺館の空間構成である。ただし、60×40ｍという数値は守護館としてはあまりにも小さい。あるいはこの空間こそは、ハレの場だけであり、ケの場はさらに東側の一段低い区画に存在したのかもしれない。

ところで、詰城―居館タイプは戦国期後半で終焉を迎える。天正四年（1576）織田信長の安土築城によって、防御空間と居住空間は一体化することとなる。この結果、庭園も城



第11図　上平寺館の推定模式図

郭内部に作庭される。こうした時代と前後する時期に築城された鳥羽山城跡（静岡県天竜市）では主郭内部に庭園遺構が検出されている。[15] また、龍王山城跡（奈良県天理市）では1997年に実施された発掘調査で、山上の曲輪から礎石建物とともに小規模な庭園遺構が検出されている。後瀬山城跡（福井県小浜市）でも同様に山上の曲輪から築山を伴う庭園遺構が検出されており、戦国期後半には山城部分にも居住空間と小規模な庭園が出現したようである。さらに豊臣秀吉時代の築城では大坂城や伏見城、肥前名護屋城に山里丸が設けられ、広大な庭園が城郭内に出現した。その後江戸時代になると各大名の居城には必ずといってよいほどに庭園が作庭される。さらに大名は城外に別邸を持ち、広大な庭園を作庭するに至るのである。

15－16世紀に、山麓居館に儀礼の場として出現した武家庭園は、16世紀後半に戦う場（防御空間）としての城郭内部に引き継がれ、17世紀以降は大名の私的空間としての別邸へと波及する。こうした庭園の位置は各時代の武家権力と強い因果関係のもとで作庭されたと考えられる。

上平寺城の山麓に構えられた御屋形（居館）の最奥部に位置する上平寺館跡の庭園は京極氏の権力を具現化するものであり、16世紀前半の守護館をそのまま残す貴重な事例として今後の調査、整備に期待したい。

註

(1) 上山春平 1982 「戦国の城と庭」(『創造の世界』第44号　小学館)
なお、同書には今谷明・上山春平・梅原猛・河合雅雄・村岡正「近代の源泉—戦国時代〈シンポジウム〉」、村岡正「池の庭から枯山水へ」、上山春平・梅原猛・ 田中淡・藤原武二・村岡正・吉村元男「日本庭園の思想〈シンポジウム〉」が掲載されている。

(2) 藤原武二 1991 「朝倉氏遺跡の林泉庭園について」(『朝倉氏遺跡資料館紀要1990 』 福井県立朝倉氏遺跡資料館)

(3) 大平愛子 1996 「武家館の庭園遺構」(『江馬氏城館跡Ⅱ—下館跡門前地区と庭園の調査—』 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室)

(4) 小島道裕 1996 「江馬氏下館と江馬氏—文献史料による考察—」(前註3 文献所収)

(5) 橋口定志 1987 「中世居館の再検討」(『東京考古』5 東京考古学談話会)

(6) 中井均 1991 「中世の居館・寺そして村落—西国を中心として—」(『中世の城と考古学』 新人物往来社)

(7) 奥州藤原氏の柳の御所で検出された園池を武家館に伴う初見とする説(前註3)もあるが、柳の御所が武家館であるとは言い難い。

(8) 前註4

(9) 朝倉義景館については、福井県教育委員会 1979 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ』に拠った。

(10) 江馬氏下館跡については、神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1996 『江馬氏城館跡Ⅱ—下館跡門前地区と庭園の調査—』に拠った。

(11) 東氏館跡については、大和村教育委員会 1984 『東氏館跡発掘調査報告書』に拠った。

(12) 高梨氏館跡については、中野市教育委員会 1993 『高梨氏館跡—発掘調査報告書—』に拠った。

(13) 東山殿に関しては百瀬正恒 1995 「東山殿(慈照寺)の建物配置と庭園」(『日本史研究』399号日本史研究会)を参考とした。

(14) 上山春平 1981 『城と国家—戦国時代の探索—』小学館 P129-P132

(15) 天竜市 1976 『遠州鳥羽山城—昭和49・50年度発掘調査報告—』

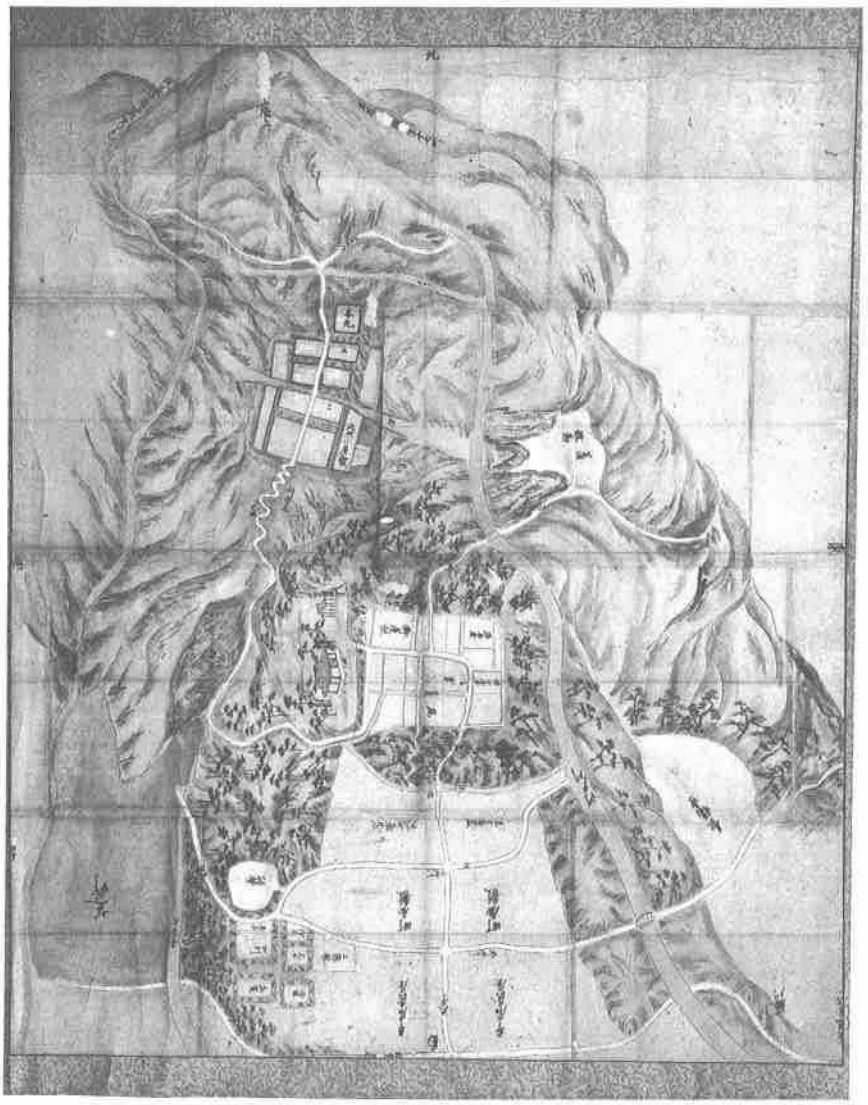
挿図出典文献

1. 朝倉氏遺跡調査研究所 1984 『一乗谷』 朝倉氏遺跡資料館
2. 小澤弘 1982 「特集　洛中洛外屏風による京都案内」『芸術新潮』新潮社
3. 山中吉明他 1997 『多気北畠氏遺跡発掘調査報告—北畠氏館跡Ⅰ—』 美杉村教育委員会
4. 滋賀県教育委員会 1991 『滋賀県中世城郭分布調査8(高島郡の城)』

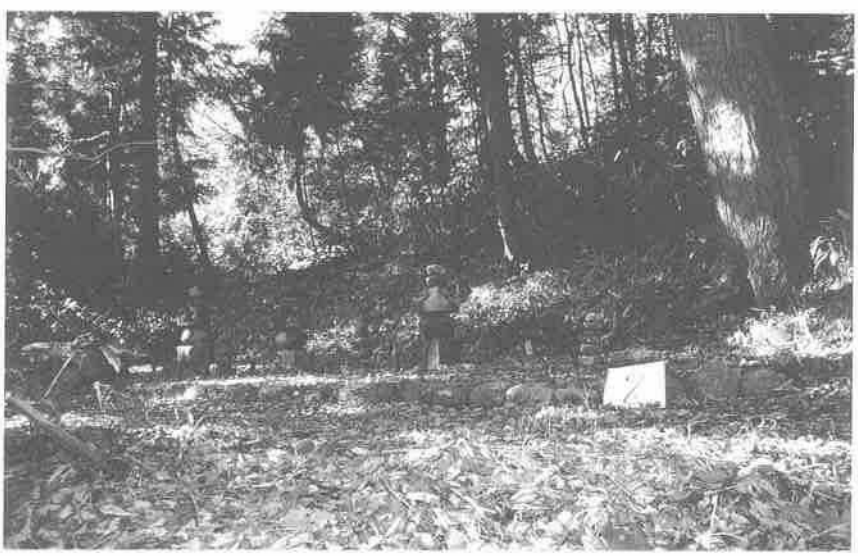
図　　版

図版 1

上平寺城絵図



京極一族の墓地



京極氏屋形跡

隠岐屋敷跡

弾正屋敷跡

庭園跡（１）

庭園跡（２）

庭園跡（３）

報 告 書 抄 録

ふりがな	じょうへいじやかたあと
書名	上平寺館跡
副書名	上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書
巻次	I
シリーズ名	伊吹町文化財調査報告書
シリーズ番号	第１２集
編著者名	髙橋順之・中井　均
編集機関	伊吹町教育委員会
所在地	〒521-0314 滋賀県坂田郡伊吹町春照３７　TEL0749-58-1121
発行年月日	西暦１９９８年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
じょうへいじやかたあと 上平寺館跡	しがけんさかたぐん 滋賀県坂田郡 いぶきちょうじょうへいじ 伊吹町上平寺	254622	42	35度 23分 12秒	136度 25分 05秒	199510～ 199710	50,000	分布調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上平寺館跡	山林	室町時代	屋敷跡、庭園跡 土墨		測量調査

伊吹町文化財調査報告書第12集
上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書 I
上 平 寺 館 跡

1998年 3月

編集・発行　滋賀県坂田郡伊吹町教育委員会
印　　刷　垂井日之出印刷